第４章　昭和61年度山口大学構内の立会調査

第１節　吉田構内の立会調査

１　山口銀行現金自動支払機設営に伴う立会調査

調査地区　　本部構内　Ｉ・Ｊ－19・20区

調査期間　　昭和61年４月17日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約11㎡

調査結果　　工事は第一学生食堂南入り口付近への現金自動支払機設置に伴い、教育学部研究実験棟と食堂との間を幅50㎝、長さ約23ｍにわたって掘判し、電線路を敷設するものである。この周辺は、学内でも特に遺構の分布密度が高く、縄文時代晩期から奈良時代にかけての各時期の遺構が検出されている地域である。

今回の調査地区の南西には弥生時代中期後半から古墳時代前期の竪穴住居跡21棟が現地保存されている「遺跡保存地区」が所在し、[1]住居の型式・構造さらには集落の形態・範囲の変遷を知るうえで学術・研究上良好な遺構分布地域として把握されている。

また、昭和56年度には、教育学部研究実験棟西端の増築、および食堂の北東における同美術科・技術科実験実習棟新営に伴って、事前調査を実施している。[2]前者では調査区北半部は後世の削平により遺構が稀薄であったが、南半部において弥生時代中期後半から後期にかけての竪穴住居跡４棟が検出され、「遺跡保存地区」の住居群が北へ拡がっていることが確認された。また後者では南北方向に流れる弥生時代後期から古墳時代の河川跡が検出されたが、住居跡は認められなかった。昭和42年の学生食堂南半部の調査でも、同様に住居跡は見つからなかったとされており、「遺跡保存地区」を中心とする住居群の分布の東限は、食堂南半部および美術科・技術科実験実習棟付近にあたるものと考えられる。

今回の調査地域は上述した各調査地にはさまれた部分にあたり、昭和60年度の立会調査でも遺構の埋存が予想されていた。[3]

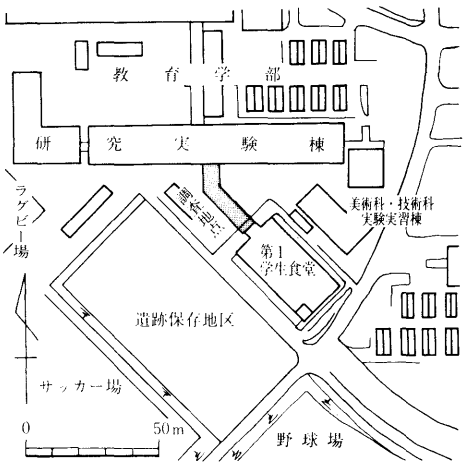


Fig. 28　調査区位置図

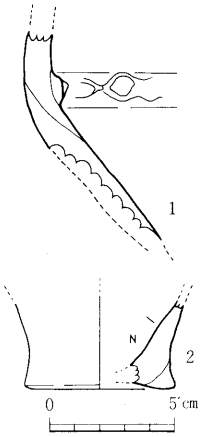


Fig. 29 出土遺物実測図

調査の結果、電線敷設路線内の南北両端部付近は既設の建物新営の際の工事や配管等で攪乱されていたが、中央部付近では削平が少なく、構内造成時の埋め土の下位には旧耕作土・床土が認められた。その直下、現地表から75cm下位に、弥生時代中期の土器を包含する黒褐色粘質土の堆積が認められる。この黒褐色粘質土は、攪乱によって部分的にのみ堆積が観察されたもので、工事路線内では少なくとも幅5m以上の分布範囲をもつ。

工事による掘削は現地表下80cmまでであったが、工事に支障のない深さまでこの層を掘り下げた結果、少なくとも35cmの層厚をもっており、その下位には砂礫の堆積が見られた。また、この深さでも地山が検出できないこと、出土遺物の磨滅が著しいことなどから、この黒褐色粘質土は遺構、特に河川跡や溝などの埋土である可能性が高い。そして、同じ時期のものと思われる河川跡ないし溝が、今回の調査地区の東約70mで検出されている。昭和58年度のラグビー場防球ネット設置に伴う調査で確認したもので、[4]集落を区画する溝と考えられ、中期後半～後期初頭の時期を与えている。幅5.5m、深さ1.1mの規模をもち、研究実験棟に沿うように東－西に走行しており、同一のものかもしれない。

出土遺物（Fig. 29, PL. 16）

1は壺で頸部に指頭による刻み目を施した1条の三角突帯が巡る。内外面とも風化により調整不明。2は窪み底の甕の底部。外面は風化のため調整不明、内面ナデ仕上げ。底径6.0cm。1は胎土良好、焼成やや不良、色調浅黄色（Hue 2.5Y 7/4）。2は胎土・焼成良好で、色調にぶい黄橙色（Hue 10YR 7/4）。（河　村）

〔注〕

1）河村吉行「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1986年）。

2）a　山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部構内H－19区の発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』、1982年）。

b　山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部構内H－16区の発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』、1982年）。

3）山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部環境整備に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。

4）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内ラグビー場防球ネット設置に伴う調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年）。

2　農学部附属農場農道整備に伴う立会調査

調査地区　　農学部構内　S－20区（B地点），U－19区（A地点）

調査期間　　昭和61年4月21日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　A地点約100㎡，B地点約65㎡

調査結果　　工事内容は、果樹園・飼料園への農作業用大型機械の搬入に伴い、崖面を削平してその勾配を緩やかにするものである。またA地点ではそれとともに、農道新設に伴う切り土部分の西側約80㎡の地域に仮設の器材庫の設置も計画された。

両調査地点にはさまれた家畜病院敷地部分では昭和41年度に発掘調査が行なわれており、いつの時期のものかは明らかでないが溝・柱穴が検出され、弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器等が出土したとされる。また、昭和60年度には果樹園の西端部で幅2.4m以上の規模をもつ平安時代から鎌倉時代にかけての河川跡が検出されており[1)]、この付近一帯には、キャンパス内の他の地域に比べて比較的良好な状態で、古代から中世にかけての集落が埋存していることを示している。

A地点での農道新設のための切り土は、南端部で最も深く、現地表から1mを要するものであった。掘削の結果、現耕作土・客土の直下、現地表から20cm掘り下げた段階で、明褐色（Hue 10YR 6/8）粘土の地山が検出された。南東端部から東西8m、南北8.5mの範囲は後世の削平により攪乱されていたが、他の範囲では浅黄色（Hue 2.5Y 7/4）の埋土をもつ柱穴群が確認され、遺構上面から土師器坏、瓦質土器が出土した。土師器は室町時代のもので、今回の調査地域周辺では、過去に室町時代の遺構は検出されていないことから、平安時代から室町時代にかけての長期にわたる集落が埋存している可能性が強い。

なお、柱穴は攪乱部分を除いて散発的にほぼ全面に分布していることから、整

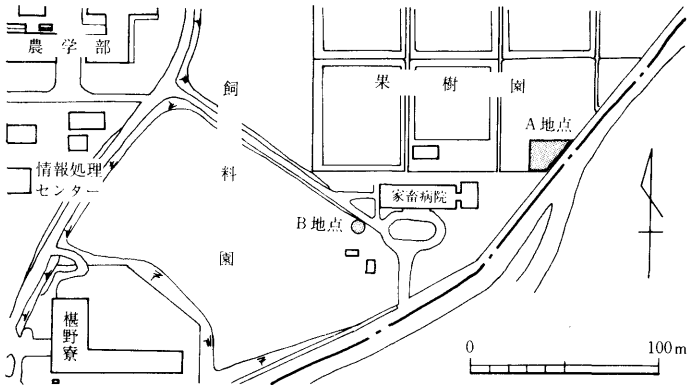


Fig. 30　調査区位置図

Fig. 31 出土遺物実測図

備に伴う切り土は、農道としても機能可能なこの攪乱部分に限定して実施することとなった。

また仮設の器材庫設置地域では、先に農道新設地域で遺構が検出されたことを考慮して、まず、南北に約９ｍの長さを幅約50cmの範囲で掘削して遺構の有無を調査することとした。その結果、設置予定地域の北端中央部で北東－南西に走る幅20cmの溝が検出された。この溝は、埋土が前述した柱穴群と同一色であることから、中世のものと考えられる。

この器材庫の設置は、現地表下約60cmまでの掘削を伴う工事となる予定であったが、遺構が検出されたため、地下の現状を変更しない工法で行なわれることとなった。

一方、Ａ地点の西南西約90ｍに位置するＢ地点では、北端部で現地表から50cm下位で地山が検出されたが、南端部では約１ｍ掘り下げても遺物包含層・地山は検出されなかった。現地表面がほぼ平坦であることから、地山が北から南へ急激に下降しているものと推察される。

出土遺物（Fig. 31, PL. 16）

Ａ地点で出土した土師器坏は、体部が直線的に立ち上がるもので、復原器高1.8cm。胎土・焼成良好で、色調灰白色（Hue 10YR 8/2）。（河　村）

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「農学部附属農場飼料園排水溝修復整備に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。

3　農学部附属農場農道交通規制に伴う立会調査

調査地区　　農学部構内　L－10区，Q－15・16区

調査期間　　昭和61年5月12日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　計約12m²

調査結果　　工事は、農繁期における農作業用車両の搬入に伴い、農道の通行を規制するため農道入口に施錠用ポールを設置するもので、現地表から40cm掘削して計9本を埋設した。各地点とも掘削深度内は構内造成時の埋め土で、遺構・遺物は認められなかった。

しかし、農業観測実験施設と第2学生食堂間の畑地で須恵器・土師器が採集されており（本節第12項参照）、この畑地に遺構あるいは遺物包含層が埋存している可能性が高い。また、食堂のすぐ東側では現地表下わずか15cmで黄橙色粘土の地山が検出されていることから、遺物包含層や遺構面は現地表からきわめて浅いところにあるものと思われ、採集遺物は耕作によって原位置から遊離したものと考えられる。

なお調査期間中、農業観測実験施設の東側の農道で須恵器坏蓋・甕、土師器を採集した。実験水田側溝を再掘削した際の土を、盛り土として農道へ散布した中に含まれていた。

採集遺物（Fig. 33, PL. 16）

短いかえりをもつ小型の須恵器蓋坏の坏蓋で、胎土・焼成良好、色調は暗青灰色（Hue 5 P B 4/1）。復原口径10.8cm。7世紀後半。　　（河　村）

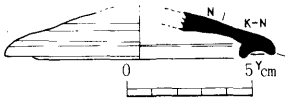


Fig. 33　採集遺物実測図

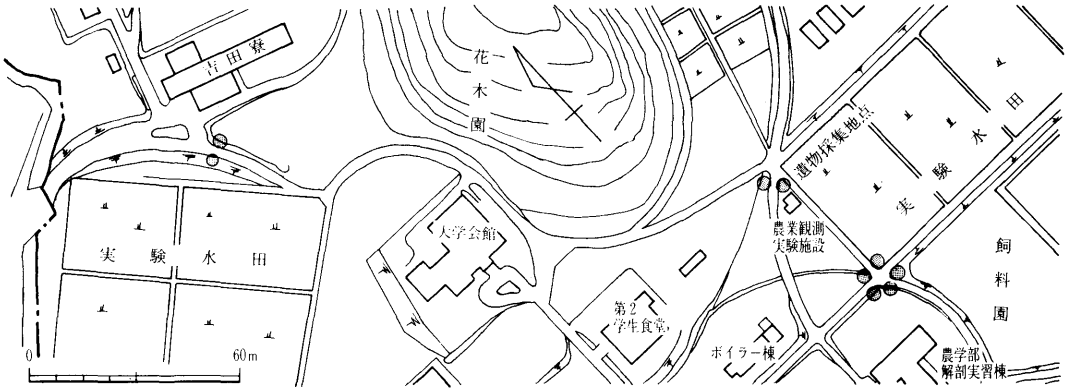


Fig. 32　調査区位置図

4　正門横（水田内）境界杭設置に伴う立会調査

調査地区　　農学部構内　Ⅰ－10区

調査期間　　昭和61年５月16日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約0.25㎡

調査結果　　工事は、キャンパス北縁を東から西へ流れる九田川の改修に伴い、本学の管理地域および改修工事の範囲を明示するためにコンクリート製の境界杭を設置するもので、調査地点は実験水田の北端中央部付近にあたる。工事自体は50㎝四方の狭い範囲にすぎないが、実験水田内の地下の状況が全く不明であるため、立会調査を実施することとした。

工事による掘削は、現在の水田面から約80㎝までであった。現在の耕作土・床土は計約20㎝の層厚をもち、その下位には第３層：灰茶褐色粘質土、第４層：礫を含む暗灰茶褐色粘質土、第５層：黒茶褐色粘質土の堆積がみられた。第３・４層とも層厚約30㎝で、第５層はその上面の確認のみにとどめたが、各層とも遺物は包含していなかった。

なお昭和58年度に、今回調査地点の南東約100ｍの大学会館敷地部分で調査を行なっており、敷地のほぼ中央を南から北ないしは北西に、周囲の丘陵縁辺部を侵食しながら開析する谷が検出されている。[1] この谷は最深部で検出面から約1.5ｍの深さをもつもので、実験水田方向への拡がりが予想されていた。

今回調査の各堆積層は、この谷の埋積土に類似するが、大学会館部分とは距離的な隔たりが大きすぎること、また吉田寮付近から延びる丘陵を侵食する別個の谷の存在も考えられることなどから、現段階で同一の谷の埋積土として理解するのは早計で、当地域での今後の調査が待たれる。　　（河　村）

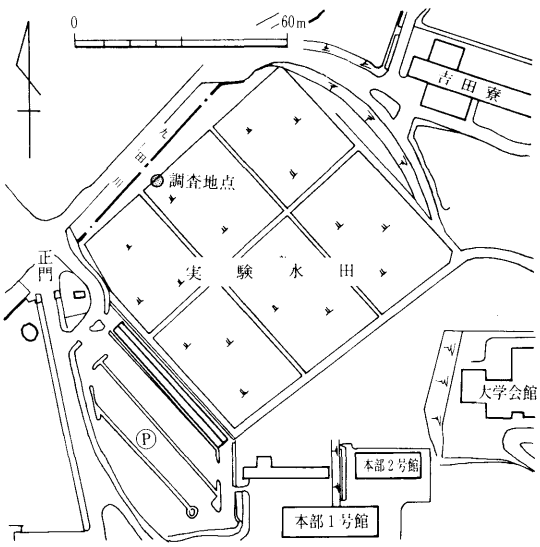


Fig. 34　調査区位置図

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年）。

5　経済学部環境整備に伴う立会調査

調査地区　　経済学部構内　M－20区

調査期間　　昭和61年6月19日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約3㎡

調査結果　　工事は植樹および記念碑の建立で、経済学部構内の東端中央部に計画された。

同学部構内の南半部は、近年の立会調査により断片的にではあるが比較的地下の状況を知ることができる資料を得ている。すなわち、大講義棟（E棟）の以北では現地表下約80㎝で黒褐色粘質土の堆積が確認され、遺構ないしは遺物包含層の存在が予想されている。また、D棟のすぐ東側では現地表下約70㎝で黄褐色粘質土の地山が検出され、双方の検出面の深さおよび両地点の位置関係から、構内造成時の大規模な削平がこの付近にまでは及んでいないことが知られている。しかし、経済学部構内はその西に位置する人文・理学部構内に比べて階段状にかなり低くなっており、両構内での地山検出面の標高差もかなりあることから、同構内東端部付近では地山の削平が著しいものと考えられる。

今回は、同学部構内での地山の削平状況・範囲を知る一助として、立会調査を実施した。

その結果、現地表から約85㎝下位で青灰色礫混じり粘質土の地山が検出された。同構内ではこの層の地山は未確認であったが、今回の調査地点の南西約50ｍに位置する人文学部校舎敷地部分では、弥生時代以降の遺構面である黄褐色粘質土の下位に青灰色粘土層が堆積していることが確かめられている。したがって、今回の調査地点付近では、構内造成により遺構面が削平され、その下位の堆積層が埋め土直下に検出されたものと考えることができ、過去に遺構が存在していたとしても、すでに消失している可能性が極めて高い。

（河　村）

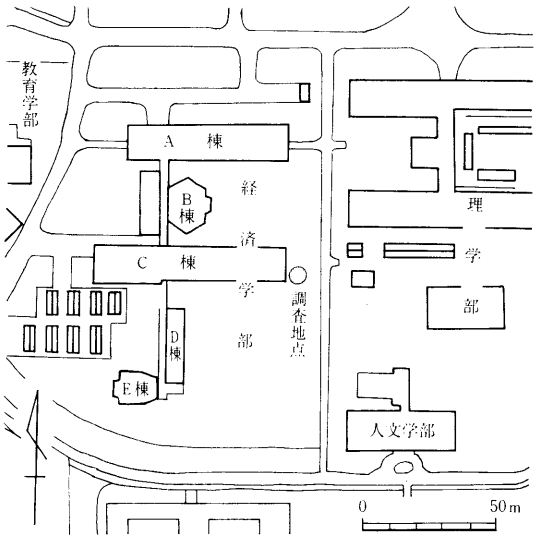


Fig. 35　調査区位置図

6　交通標識設置に伴う立会調査

調査地区　　本部構内 H－23区，J－9区，P－22区，農学部構内 S－20区，W－16区

調査期間　　昭和61年6月27日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約3㎡

調査結果　　工事は、吉田構内の各入り口に交通規制用の標識を設けるため、その支柱の基礎となる部分について、各々1m×0.5mの範囲で現地表から約30cm掘り下げるというものである。5地域6地点を調査した。なお工事で掘削した実際の深さは、H－23・J－9・P－22区で現地表から40cm、S－20・W－16区ではそれぞれ30cm、35cmであった。

掘削の結果は、各地点とも構内造成時の埋め土の堆積が認められたにとどまり、遺構・遺物包含層および地山は検出できなかった。なお、J－9区・S－20区・W－16区の3地点では埋め土の中に地山の土である明黄褐色（Hue 10YR 6/8）粘土が混在しており、各地区周辺で地山の削平が行なわれていることが予想される。

S－20区の調査地点周辺では、昭和41年度に西側の飼料園で実施した試掘調査で遺構が検出され、その後、大きな現状変更はされていない。したがって、埋め土内の地山土は、家畜病院の敷地を造成によって一段低く下げた際の削平に起因するものと思われる。

また、P－22区の調査地点では埋め土中から須恵器片が出土した。独身寮の西隣で行なった国際交流会館新営に伴う調査（第3章参照）の際、古墳時代後期まで流れていた河川跡が検出されており、その河川がこの付近にまで伸びていたことが予想されるが、大学統合移転時の造成により他の遺構とともに削平され、遺物が遊離した可能性が考えられる。

（河　村）

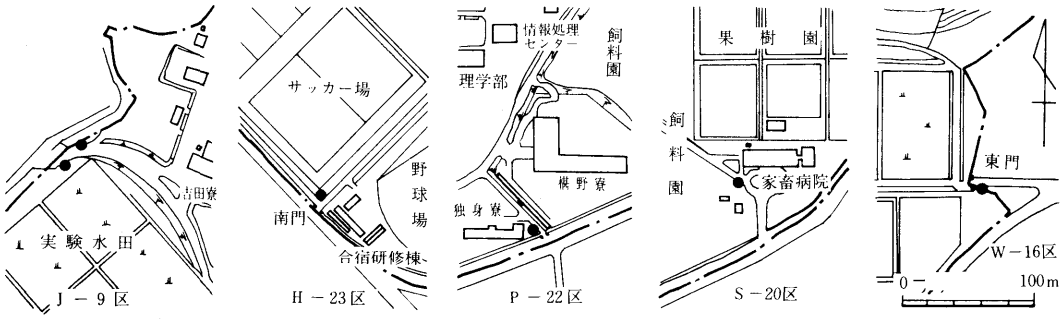


Fig. 36　調査区位置図

7　教養部自動販売機増設に伴う立会調査

調査地区　　教養部構内　K・L－18区

調査期間　　昭和61年8月19日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約3.5m²

調査結果　　工事は、自動販売機を被覆する簡易屋根設置のため、その支柱の基礎となる部分を東西各2ヵ所、計4ヵ所掘削し、周囲にタイル状のロッキングブロックを敷設するものであった。また、この工事の際、支障となるベンチを西へ約3m移動させるため、このベンチの基礎部分についても合わせて立会調査を実施した。

簡易屋根基礎部分の掘削は現地表から30～40cmを要するものであったが、4ヵ所いずれも構内造成時の埋め土の堆積がみられ、顕著な遺構・遺物は皆無であった。しかし、南東隅の基礎部分で、この埋め土の中に、昭和58年度に今回の工事地域の北約40mにある教養部屋外掲示板部分の調査[1)]で確認した、茶褐色粘質土（遺物包含層）が混入していた。

この遺物包含層の拡がりは現段階ではまだ確認できないが、教養部講義棟西端部でも弥生土器を含む層が検出されている[2)]こと、旧地形が東から西へ下降していたと推定されることなどから、合併講義棟以西にもその堆積範囲が及ぶものと考えられる。ただし、前述の調査で旧耕作土・床土が全く検出されていないことから、大学統合移転時の造成によって遺物包含層が広範囲にわたりかなり削平されていることが予想される。

またベンチ移動に伴う4ヵ所の基礎部分の調査では、工事に必要な現地表下30cmまでの掘削を行なったが、各ヵ所とも構内造成時の埋め土の範囲内であった。

（河　村）

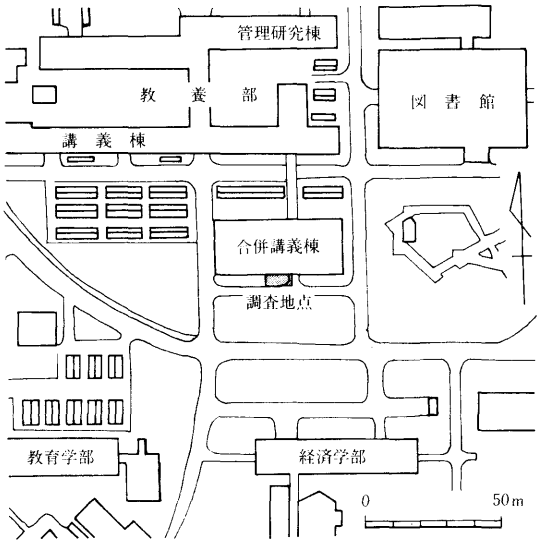


Fig. 37　調査区位置図

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「教養部環境整備に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年）。

2）前掲注1）に同じ。

8　教養部身体障害者用スロープ取設に伴う立会調査

調査地区　　教養部構内　L－15・16区

調査期間　　昭和61年9月2日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約3㎡

調査結果　　工事は、教養部管理研究棟の東出入口に身障者用の昇降スロープを新設するもので、東西幅約3m、南北長約8mが工事対象範囲であった。しかし、工事地域の南側については掘削を行なわず、主に盛り土によってスロープを新設するため、工事に伴う実際の掘削は、管理研究棟と並行して東西に走る循環道路からの入口付近の東西約3m、南北約2.5mの地域であった。立会調査は、この範囲のうち掘削の最も深い、工事地域の東西両端部に沿って南北に設けられるスロープ基礎部分について実施した。

現地表から70cmまでを掘削し土層の堆積状況を観察したが、構内造成時の埋め土以外に顕著な堆積層は検出できなかった。しかし、循環道路を隔てて一段高い大学会館前庭部では、南端中央部付近で最大の厚さが約80cmにもおよぶ遺物包含層が検出されている。[1] この遺物包含層は少なくとも3層に分層できるが、縄文～江戸の各時代におよぶ遺物を包含し、北から南への地山の下降とともに漸次その層厚を増している。ただし、前庭南西端部ではほとんど検出されないこと、また前庭部の南に位置する図書館増築部分でも同一の遺物包含層を検出していることなどから、[2] その分布範囲は南および西へ拡がるものと考えられる。今回の調査地域付近でも、今後、掘削深度が深い工事の際に遺物包含層が検出される可能性は十分考えられ、注意が必要である。（河　村）

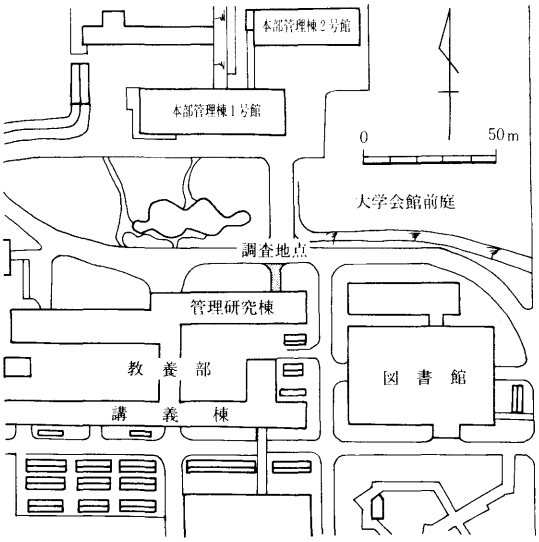


Fig. 38　調査区位置図

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。

2）山口大学埋蔵文化財資料館「中央図書館増築予定地M－16区の発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』、1985年）。

9　経済学部散水栓取設に伴う立会調査

調査地区　　経済学部構内　L・M－20区

調査期間　　昭和61年12月1日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　計約4㎡

調査結果　　工事は、経済学部C・D棟間および大講義棟（E棟）の周囲に、現地表から30㎝掘削して給水管を埋設し、その管路内に前者では3ヵ所、後者では2ヵ所の散水栓を取設するものである。昭和55年度に実施した同学部大講義棟新営に伴う調査[1)]結果から、大講義棟周囲の工事地点は、掘削深度が構内造成時の埋め土の範囲内であることが明らかなため調査対象から除外し、C・D棟間の掘削工事について立会調査を実施した。

その結果、給水管管路、散水栓取設地点とも工事による掘削深度内はいずれも構内造成時の埋め土の堆積が認められ、顕著な遺構・遺物は皆無であった。したがって、C・D棟間では少なくとも現地表から30㎝までの掘削では地山が検出されず、先に経済学部環境整備に伴う立会調査（本節第5項参照）で触れたように、同学部構内南東域での地山の検出面は現地表から約70㎝～80㎝下位付近にあるものと考えられる。

また、経済学部の西に隣接する遺跡保存地区周辺での遺構の分布状況・遺存度から推して、同学部構内では東から西への地山の自然傾斜に伴い、西に向かうにつれて埋蔵文化財が良好な状態で遺存している可能性が強いが、遺構面の削平状況・範囲および遺構の有無を判断するには、現状では未だ資料不十分で、今後の資料の増加が望まれる。

（河　村）

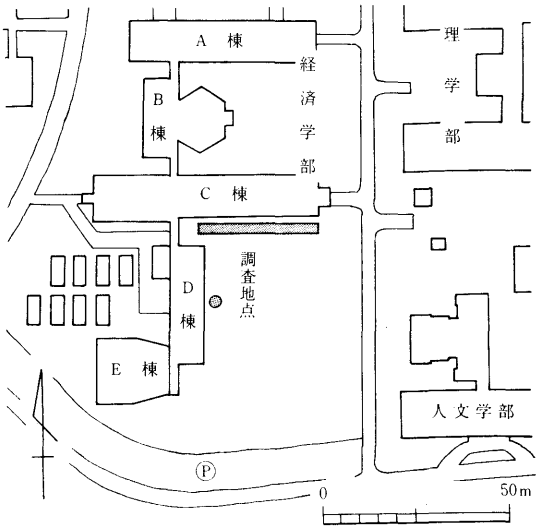


Fig. 39　調査区位置図

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「昭和55年度調査の概要」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』、1982年）。

10　水泳プール改修等に伴う立会調査

調査地区　　本部構内　E・F－16区，H－15区

調査期間　　昭和61年12月8日（A～C地点），同12月10日（D地点）

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　A地点 約4.5㎡，B地点 約4㎡，C地点 約7㎡，D地点 約11㎡

調査結果　　工事は、プール改修に伴う3地点（A～C地点）と、体育館の変電施設新営に伴う1地点（D地点）について実施した。

プール改修工事では、深い掘削を要する循環装置の改修部分のうち、新規に埋設される配管路について調査を行なった。工事に伴い現地表から50cmまで掘削したが、3地点ともすべて構内造成時の埋め土の範囲内であった。しかし、B地点では旧耕作土・床土の直下、現地表から65cm下位で、遺物は含まないものの、茶褐色粘質土の堆積が認められた。西に隣接するテニスコートのフェンス改修に伴う調査時に、弥生時代～古墳時代の遺物を包含する同一層が検出されている。[1)] この包含層の北への拡がりを調べるために、管路北端部のC地点で工事に支障のない現地表下1.5mまで深掘りを行なったが、旧耕作土の下面が検出されたにすぎず、同層はその下位に堆積しているものと思われる。B・C両地点とも現地表面の標高差はほとんどなく、地山がC地点付近で南から北へ急激に自然傾斜しているものと考えられるが、テニスコート地域ではこの地山の傾斜が認められないことから、プール本体の存在する地域に小規模な谷が埋存している可能性が高い。

なおD地点では、工事掘削深度である現地表下約70cmまで掘り下げたが、すべての構内造成時の埋め土の範囲内で、遺構・遺物包含層の確認はできなかった。

（河　村）

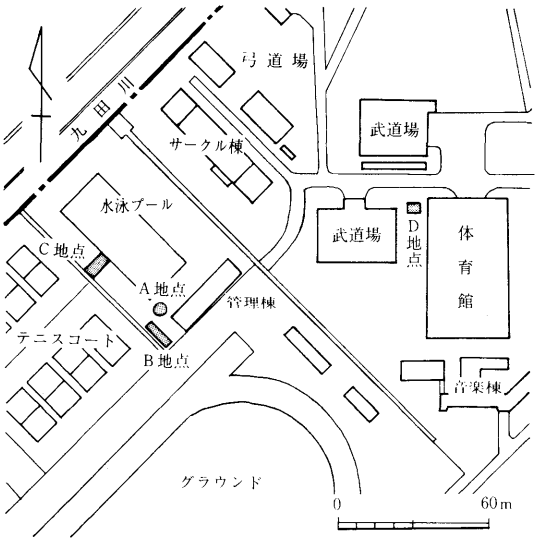


Fig. 40　調査区位置図

〔注〕

1）a　山口大学埋蔵文化財資料館「学生部テニスコートフェンス改修に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年）。

b　山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内学生部テニスコートフェンス改修に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』、1985年）。

11　農学部附属農場水道管埋設に伴う立会調査

調査地区　　農学部構内　S－12区

調査期間　　昭和61年12月9日

調査方法　　工事施工時における立会調査

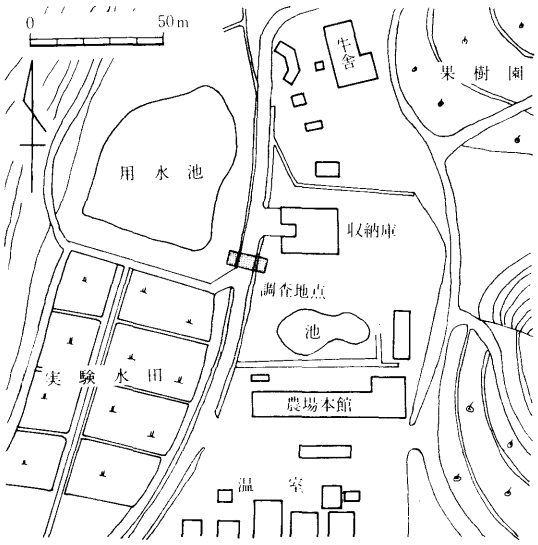
調査面積　　約3㎡

調査結果　　工事は、農場本館と牛舎との間にすでに埋設されている水道管を、途中で分岐させるために農道を掘削するものである。なお、農道中央部は既設の配管埋設工事の際に削平されているため、農道の東西両端部について立会調査を実施した。

工事による掘削は現地表から50cmまでであったが、両端部とも工事範囲内は構内造成時の埋め土で、埋蔵文化財への影響はなかった。しかし、当地域周辺は、今までわずかに牛舎敷地部分で調査がなされているにすぎず、埋蔵文化財の分布状況については不明な点が多いことから、今後の諸開発に先立ち地下の状況を把握するため、深掘りを行なった。

その結果、東端部では現地表から70cm下位で黄灰褐色礫混じり粘土の地山が検出され、また西端部では現地表から80cm下位で谷の埋積土を思わせる黒灰色粘土の堆積がみられた。

附属農場の各施設が所在するキャンパスの北東域は、北から南へ舌状に張り出した二つの丘陵にはさまれた、狭い谷あいに立地する。西半部の奥部には用水池が存在し、その前面に開かれる実験水田は、周囲に比べ一段低くなっている。今回調査地点の北東約70mに位置する牛舎の敷地部分の調査では、弥生時代の溝・土壙、古墳時代の竪穴住居跡を検出したとされていることから、本来の谷は、用水池奥部に湧水点をもつもので、当該地域を東西に二分してのびる農道よりも西側の地域に存在するものと思われる。したがって生活関連遺構は、谷を避けたこの農道以東の、丘陵縁辺部であった地域に存在する可能性が高い。



（河　村）

Fig. 41　調査区位置図

12　汚水排水管等総改修に伴う立会調査

調査地区　　吉田構内　M－18区，O－15・16区

調査期間　　昭和61年12月23日(M－18区)，同62年1月12日(O－16区)，同1月19日(O－15区)

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　M－18区 約5.5m²，O－16区 約7m²，O－15区 約3m²

調査結果　　工事内容は、吉田構内に分散する汚水・実験各排水管および雨水桝の老朽化に伴う改修工事で、これまでの調査により周辺に顕著な埋蔵文化財が認められている地域と、調査資料の不足している地域を選定して、立会調査を実施したものである。

M－18区では東西1m、南北5.5mの範囲について、工事に必要とされる掘削深度である現地表下50cmまで掘り下げたが、構内造成時の埋め土の堆積がみられたにとどまった。

O－16区では東西1m、南北7mの範囲を調査した。南半部は、後世の攪乱が著しく、現地表下65cmまで構内造成時の埋め土がみられた。北半部では、この埋め土の直下、現地表下40cmで灰黄褐色（Hue 10YR 2/6）土の堆積を確認したが、遺物は包含していなかった。なお、工事による掘削はこの灰黄褐色上面まででであるため、地山は確認していない。

O－15区での工事は、一段高い東側からの土砂流入防止を目的として、東西0.4m、南北8mの範囲を掘削し土留め用の擁壁を新設するものである。掘削深度は現地表からわずか20cmほどであるが、工事地域の西に隣接する第2学生食堂敷地部分で、昭和46年の調査時に弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡6棟をはじめとして同時期の土壙・溝多数が検出されており、今回の工事地域を含めた周辺地域一帯がこの時期の居住域であったと考えられていることから、立会調査を実施することとした。

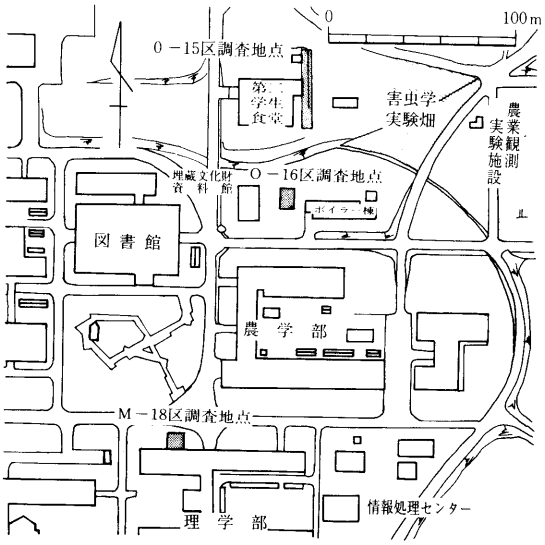


Fig. 42　調査区位置図

その結果、15cmの層厚をもつ表土直下に黄橙色（Hue 10YR 7/8）粘土の地山が検出されたが、顕著な遺構は認められなかった。なお、表土中から土師質土器

鼎の脚部が出土している。

出土遺物（Fig. 43－1）

土師質土器鼎（かなえ）の脚部で、脚裾部を欠損する。指圧による整形痕を明瞭に残し、粗雑なナデを施す。二次加熱による赤変が随所にみられ、煤の付着も著しい。

O－15区調査地点の表土中より出土。

採集遺物（Fig. 43-2～6）

O－15区調査地点の東に隣接する農学部害虫学実験畑で採集した須恵器である。2～4は甕。2は大形の甕の胴部で、外面に平行タタキがわずかに残る。3・4は短く外反する口縁部をもち、端部は屈曲して上方へ立ち上がる。内外面とも横ナデ仕上げ。同一個体の可能性がある。5は壺の底部で、内外面とも横ナデ仕上げであるが、外底面はヘラ切り放しのまま放置する。6は坏の底部。底部と体部の境より内側にわずかに外方へ開く高台を貼付する。内外面とも横ナデ仕上げ。実験畑採集資料には他に土師器甑（こしき）の把手などがあるが、大半は8世紀代の須恵器で、第2学生食堂敷地部分とは時期の異なる遺構ないしは遺物包含層が、付近に存在する可能性がある。

（河　村）

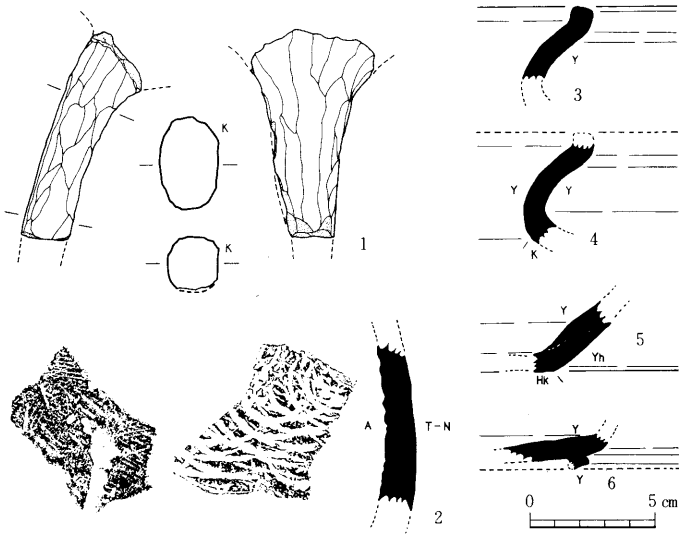


Fig. 43　出土遺物および採集遺物実測図

Tab. 5　出土遺物および採集遺物観察表

No.	器　種	口径 *底径 (cm)	器高 (現存高) (cm)	色　調	胎　土	焼成	備　考
O－15区調査地点　表土中							
1	土師質土器　鍋	－	(8.2)	橙色（5 YR7/6）	良好　径2mm以下の長石・石英含む	良好	二次加熱による赤変著しい。煤付着
農学部害虫学実験畑　採集							
2	須恵器　甕	－	(6.5)	明オリーブ灰色(2.5GY7/1)	やや粗い　1mm以下の砂粒若干含む	良好	
3	須恵器　甕	－	(3.0)	外面－灰白色(10Y7/1) 内面－青灰色（5 B6/1）	精良　1mm以下の砂粒若干含む	良好	4と同一個体か
4	須恵器　甕	－	(3.9)	外面－灰白色(10Y7/1) 内面－青灰色（5 B　6/1）	精良　1mm以下の砂粒若干含む	良好	3と同一個体か
5	須恵器　壺	－	(2.8)	青灰色(10BG5/1)	良好　2mm以下の砂粒若干含む	良好	
6	須恵器　坏	－	(1.3)	明青灰色（5 PB7/1）	良好　1mm以下の砂粒わずかに含む	良好	

13　本部身体障害者用スロープ取設に伴う立会調査

調査地区　　本部構内　L－14区

調査期間　　昭和62年２月25日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約12㎡

調査結果　　工事は、本部管理棟１号館の東側の出入口に身障者用の昇降スロープを新設するものである。当地域周辺は、「遺跡保存地区」周辺同様、埋蔵文化財の分布状況が次第に明らかになってきている。大学会館前庭部では竪穴住居跡・袋状竪穴・土壙・溝・埋甕など弥生時代前期～江戸時代の各時期の遺構が検出されており、しかも西に向かうにつれて分布密度が高く、広範囲に遺存していた。[1] また、本部２号館の敷地でも弥生時代後期後半の土壙や、溝で囲んだ区画内に井戸等を備えた室町時代の屋敷跡が検出されており、[2] この付近一帯が弥生時代以降、生活の場として機能していたことを示唆している。

工事による掘削は現地表下43㎝までと比較的浅い。しかし、上述の前庭部の本部寄りでは現地表下約90㎝で遺構面に達し、当工事地域が前庭部に比べやや低くなっていることから、遺構に影響を及ぼすことが十分に考えられたため、立会調査を実施した。

その結果、工事による掘削は構内造成時の埋め土の範囲内であったが、南端部を深掘りしたところ、現地表下80㎝で黄橙色粘質土の地山が検出され、前庭部分の地山面との標高差はほとんどないものと考えられた。したがって、本部管理棟１号館の前庭部寄りの地域では構内造成による大規模な削平は行なわれておらず、遺構が埋存している可能性が高い。　（河　村）

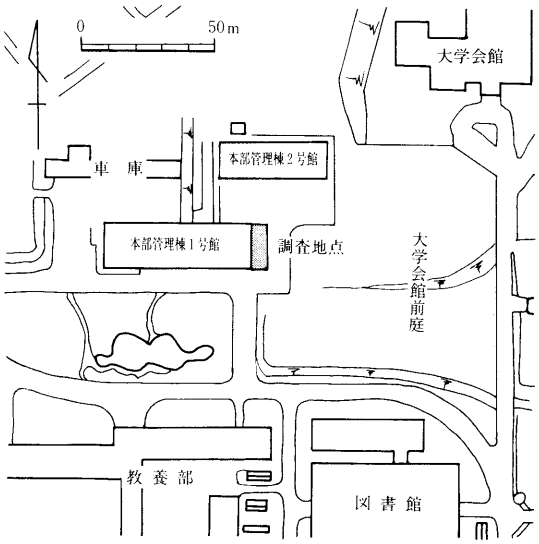


Fig. 44　調査区位置図

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。

2）山口大学埋蔵文化財資料館「昭和54年度調査の概要」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』、1982年）。

14　経済学部身体障害者用スロープ取設に伴う立会調査

調査地区　　経済学部構内　K－20区，L－18～20区

調査期間　　昭和62年3月13日（C地点），同3月17日（A・B地点），同3月23日（D地点）

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　A地点 約30㎡，B地点 約20㎡，C地点 約16㎡，D地点 約12㎡

調査結果　　工事に伴う掘削は現地表からA地点30㎝、B・C地点40㎝、D地点20㎝であったが、今後の諸開発に先立ち、深掘りを行なって地下の状況を観察することとした。

A地点では現地表下50㎝で植物遺体を含む黒色粘土の堆積がみられた。層厚は20㎝で、調査区内では遺物は出土しなかった。また、その下位に淡青灰色砂礫層の地山が検出され、わずかに湧水が認められたことから、この付近は谷状の低湿地を形成していたものと考えられる。なお、A地点の北東に位置する中央広場は、大学統合移転時の調査で谷状の低湿地であったことが確かめられており、このA地点部分と一連のものと考えられるが、出土遺物がないため、時期比定については今後の調査に期待したい。

B地点は現地表から1.4m掘り下げたが攪乱が著しく、良好な資料は得られていない。

C地点は現地表から1.15mまで構内造成時の埋め土で、その直下に黄褐色粘土の地山が認められたが遺構は検出されず、この地点も攪乱が著しいものと思われる。

D地点ではスロープ取設に併行し、その下位に排水管を南北に埋設する工事が予定された。スロープ取設工事に伴う掘削では顕著な遺構・遺物は確認されなかったが、現地表から40㎝掘り下げたところで黒褐色粘質土の埋土をもつ柱穴が検出された。排水管埋設に伴う掘削は現地表から60㎝を必要とするものであったが、各関係部局と協議した結果、工事による掘削を、遺構を破壊しない現地表下35㎝までにとどめることで了承が得られ、遺構は現地保存されることとなった。

（河　村）

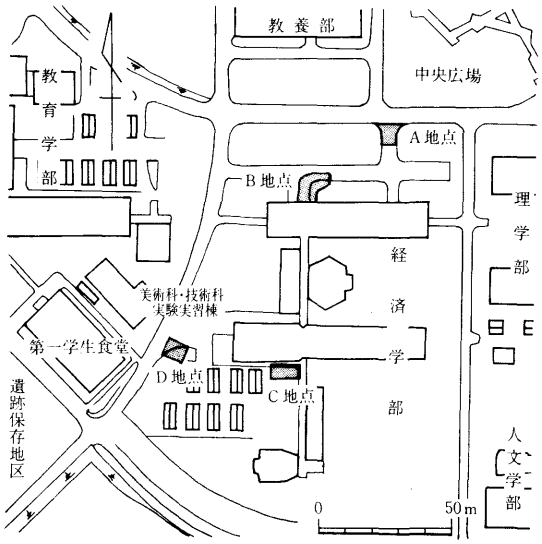


Fig. 45　調査区位置図

15　附属図書館荷物運搬用スロープ取設に伴う立会調査

調査地区　　L－16区

調査期間　　昭和62年３月16日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約８㎡

調査結果　　工事は、附属図書館西入口付近を幅約1.5m、長さ約６mにわたって弧状に掘削し、荷物運搬用の昇降スロープを取設するもので、掘削は現地表から40cmまでである。

今回の調査地点の北東に隣接する図書館増築部分では、弥生時代後期から平安時代にかけての溝７条、古墳時代前期を上限とする河川跡のほか、土壙・柱穴が検出されている。また、灰褐色粘質土・黒褐色粘質土・明褐色砂質土の３層に分層される遺物包含層がほぼ全面に分布しており、弥生時代前期から鎌倉時代前半にかけての多量の遺物が出土している。[1] 増築部分の地表面はほぼ平坦で、遺物包含層の最上面は地表面から約１m、遺構面は約1.3～1.4m下位で検出される。しかし地表は、増築部分の南端部から、南へ向かって急激に下降しており、今回の調査地点は増築部分より約1.1～1.2mも低くなっていることから、工事により遺物包含層に影響を及ぼすことが十分に考えられたため、立会調査を実施した。

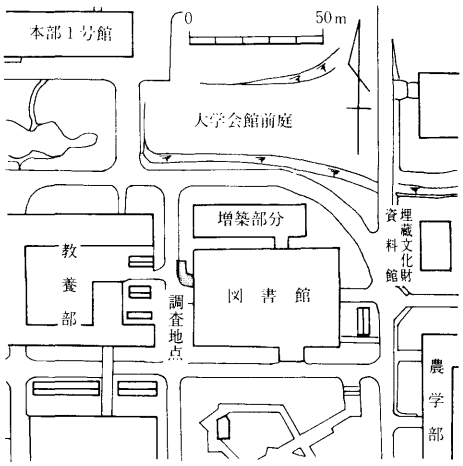


Fig. 46　調査区位置図

その結果、工事範囲の大部分が既設の埋設管によって大きく削平されていたため、遺物包含層の堆積、遺構は認められなかった。しかし、増築部分で検出した黒褐色粘質土が埋め土中に混在しており、内部から弥生土器が出土した。

出土遺物（Fig. 47, PL. 16）

壺の頸部から肩部にかけての破片で、外面に扁平な１条の突帯を貼り付ける。風化著しく内外面とも調整不明。胎土には砂粒をやや多く含み、やや不良。焼成は良好で色調は橙色（Hue 5 Y R 6/6）。　　（河　村）

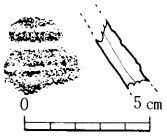


Fig. 47　出土遺物実測図

〔注〕
1）山口大学埋蔵文化財資料館「中央図書館増築予定地Ｍ－16区の発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』、1985年）。

16　教養部37番教室改修に伴う立会調査

調査地区　　教養部構内　K－16区

調査期間　　昭和62年３月24日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約１㎡

調査結果　　工事は、教養部講義棟の改修に付随して汚水管および汚水桝を埋設するものである。今回の調査地点の南側約20ｍの地点では、屋外掲示板設置に伴う立会調査を実施しており、地表面から60～65㎝下位で茶褐色粘質土の遺物包含層が検出されている。[1)] この層の平面的な拡がりは確認していないが、現段階では、大学会館前庭部や図書館増築部分で検出した遺物包含層と同一のものと考えており、今回の調査地点付近にも埋存する可能性が十分に考えられた。なお、汚水管の埋設による掘削は現地表から35㎝までで、直接埋蔵文化財に影響のない深度であることが確かめられているため、調査対象から除外した。

汚水桝の埋設に伴い現地表から60㎝まで掘削したが、構内造成時の埋め土の範囲内であり、顕著な遺構・遺物は認められなかった。また、工事に支障のない現地表下75㎝の深さまで掘り下げたが、堆積層に変化はなかった。しかし、埋め土内に遺物包含層である茶褐色粘質土がブロック状に混在しており、この周辺に堆積する遺物包含層が、造成等により多少なりとも削平を受けていることが考えられる。

教養部構内ではこれまで点的な立会調査によって断片的な資料が得られているにすぎない。したがって、学内でも比較的調査の進んでいる本部・教育学部各構内に比べ、同構内での埋蔵文化財の分存状況は未だ十分には把握しきれておらず、今後の調査が必要であろう。（河　村）

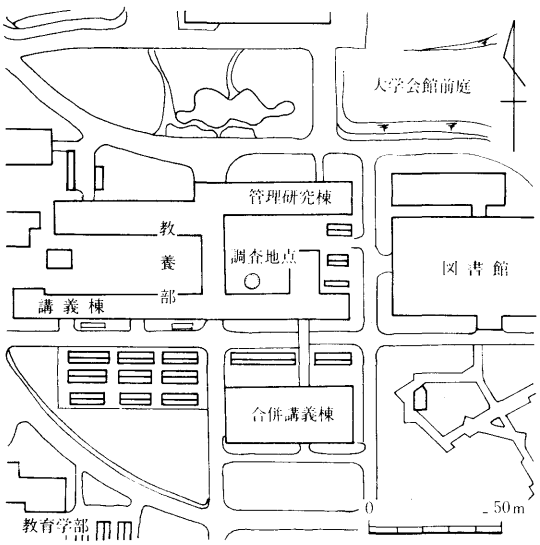


Fig. 48　調査区位置図

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「教養部環境整備に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年）。

17　市道神郷１号線および問田神郷線の送水管埋設に伴う立会調査

調査地区　　市道神郷１号線および問田神号線の南縁部

調査期間　　昭和61年８月11～29日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約2100m²

調査結果　　大学敷地の南縁部を弧状に巡る市道で、幅約1.6m、総延長距離約1270mに及ぶ送水管埋設工事が計画された。この市道を隔てた附属養護学校敷地内でも、今までの調査で遺構が検出されており、大学構内吉田遺跡の市道以南への拡がりが推察されていることから、工事によって未周知の遺物包含層・遺構に影響する可能性が十分に考えられた。よって関係機関と協議の結果、工事内容・規模等を勘案し、山口市教育委員会が立会調査を実施することとなった。当資料館も、構内遺跡南縁部付近での土層の堆積状況、遺物包含層・遺構の有無に関する資料が不十分であることから、調査協力を行なうこととした。

なお掲載した資料は、山口市教育委員会の篤志により提供を受けたものであるが、当該機関から報文の発行が予定されているため、本稿では調査結果の概要を記すにとどめる。

主な遺構には家畜病院付近で検出された幅約５mの奈良～平安時代の河川跡がある。墨書のある須恵器坏蓋（PL.17－⑦）・土師器・六連式製塩土器（PL.17－⑥）などが出土し、出土遺物の時期や推定される流路方向から考えて、昭和60年度に果樹園西端部で検出した河川跡と同一のものであろう[1)]。他に、ハンドボール場前で古墳時代後期の溝、また南門前

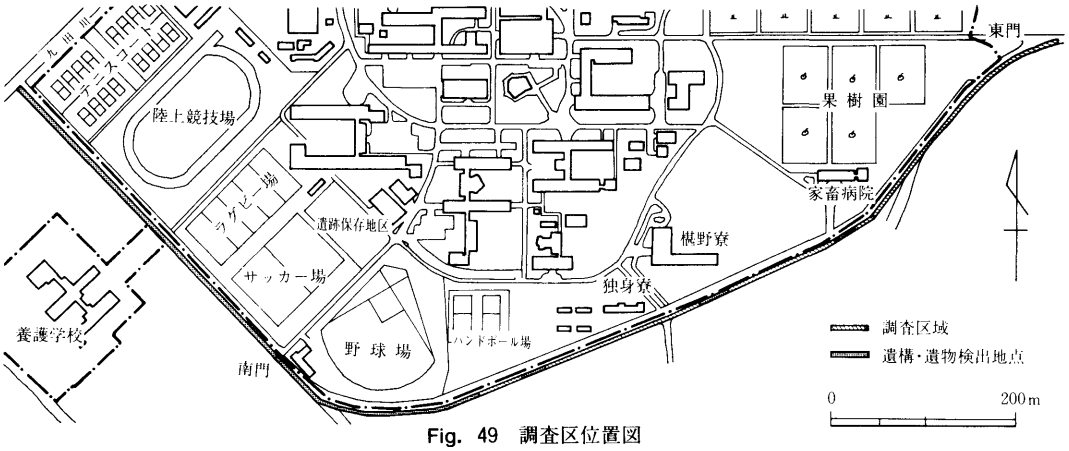


Fig. 49　調査区位置図

でも溝状遺構が検出されており、後者からはヘラ切り底の土師器埦が出土している。

遺物包含層は、野球場南東端部から南門にかけての少なくとも幅約160mの範囲に集中分布し、上層から淡茶褐色粘質土、暗茶褐色粘質土の二層に分層される。前者は10～20cmの層厚をもち、須恵器等を含むが遺物の出土量は極めて少ない、後者は最大約30cmの層厚をもち、主に弥生時代前期末から後期末の遺物を包含する。中でも壺・甕を主体とした前期末から中期初頭の遺物は出土量が比較的多く、良好な資料も少なくない。

他にハンドボール場や椹野寮付近でも、遺物包含層が認められている。また、先に述べた南門前の溝状遺構が淡茶褐色粘質土を掘り込んでいることから、古墳時代後期から下っても平安時代前半頃の遺物を包含する堆積層もまた、この周辺にあるものと思われる。

遺物は南門以北でも出土している。南門からラグビー場付近までは、弥生時代前期末～中期初頭の土器を包含する堆積層が、大学側の断面にのみ部分的に検出され、さらに地山がこの部分で不規則に落ち込んでいることから、当該期の遺構の存在を予想させる。ラグビー場以北では、遺物は砂礫層からの出土で、周辺からの流れ込みである公算が強い。

野球場周りの遺物包含層から出土した遺物（ＰＬ．17－①～⑤）について、簡単に触れておく。

壺は、口縁部が大きく開き肥厚帯を有するもの、短く緩やかに外反するものなどがある。前者には、頸部外面に多条の沈線が巡り、内面に断面三角形の突帯を１条貼付するものや、肥厚帯に貝殻による鋸歯文を施文するものなどがある。肩部から胴部にかけては、無軸羽状文・木葉文が施文されるが、いずれも施文具は貝殻で、ヘラ描きの文様はない。

甕は、短く緩やかに外反する口縁下にヘラによる沈線が４～６条巡るもの、口縁部が内面に稜をもって水平に近く屈曲するものなどがあり、後者では沈線・突帯をもつものはみられない。また、直立する口縁部の下位に１条の突帯を貼付し、ヘラによる刻目を施すものもある。後期の土器は前期末～中期初めのものに次いで多く、複合口縁をもつ壺、「く」の字に外反する口縁部をもつ甕、上位で屈曲し外反する高坏、支脚などがある。

今回の調査は工事施工時における立会調査であることから、調査内容には限界があるが、本学構内南西縁部で連続的に土層の堆積状況、遺構・遺物包含層の分布範囲、旧地形の概略を把握することができた。今後、本構内および周辺地域における比較・検討、または諸開発の策定に寄与する良好な資料として意義深い。　（河　村）

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館「農学部附属農場飼料園排水溝修復整備に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。

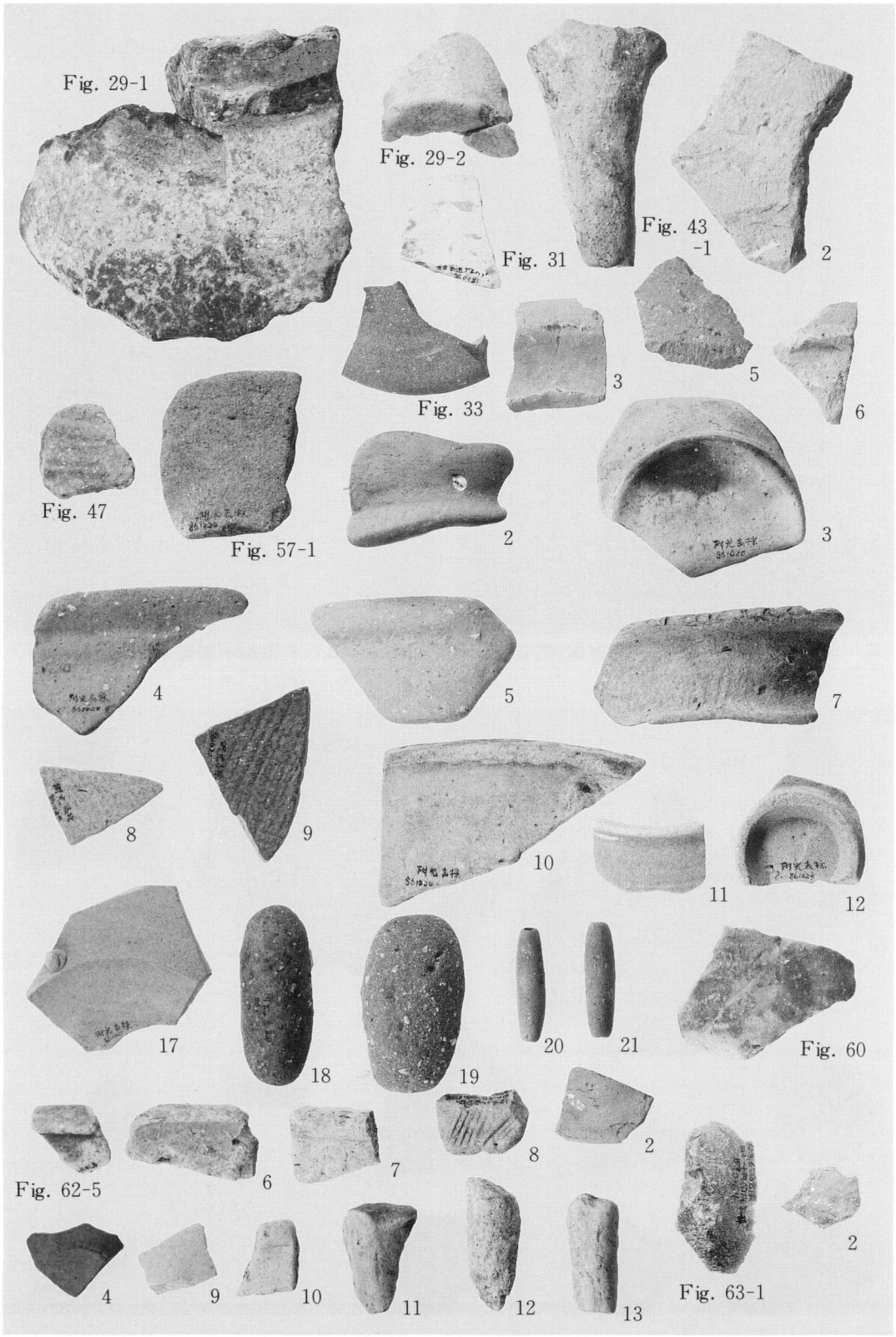
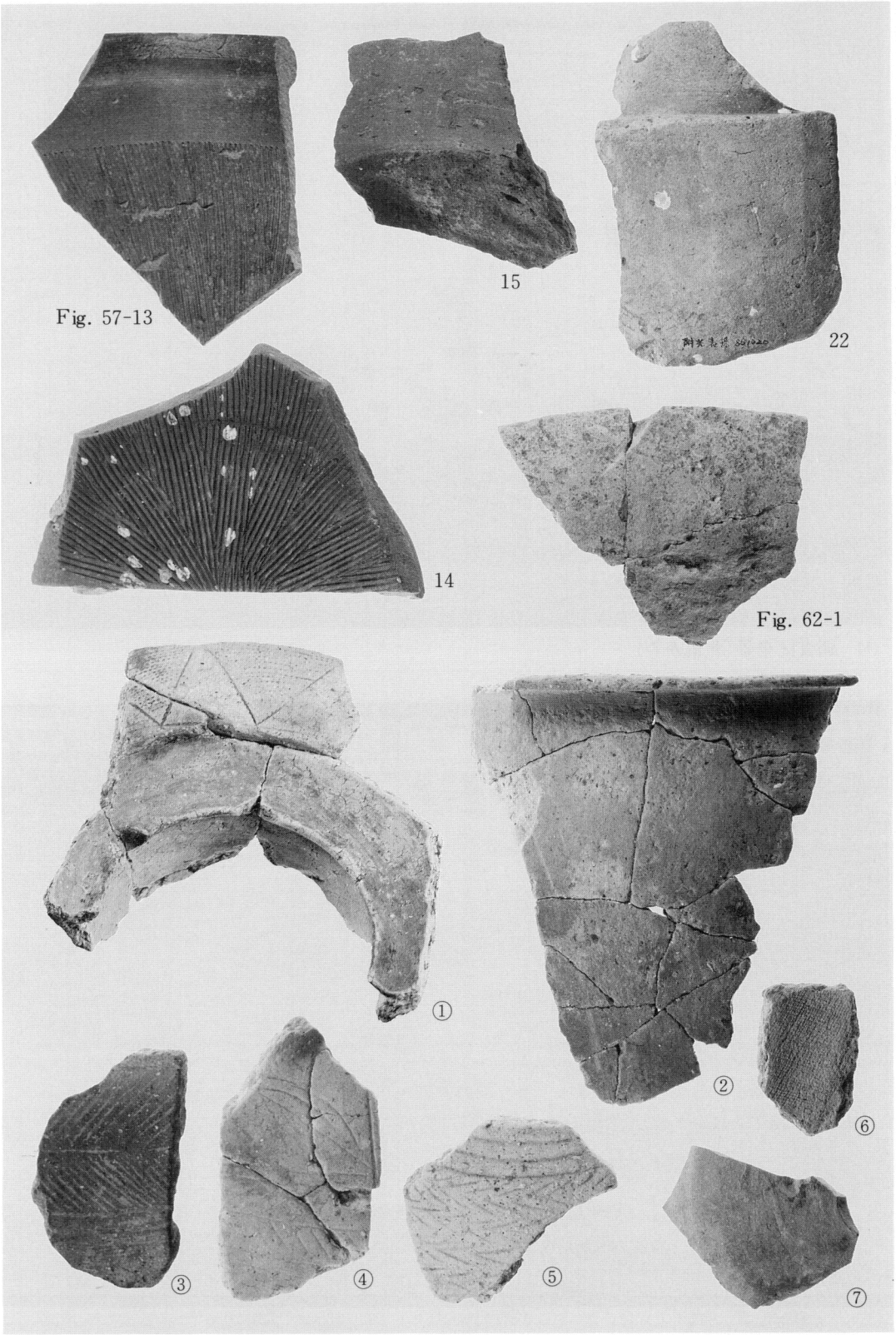


Fig. 29-1
Fig. 29-2
Fig. 31
Fig. 43
-1
2
3
5
6
Fig. 33
Fig. 47
Fig. 57-1
2
3
4
5
7
8
9
10
11
12
17
18
19
20
21
Fig. 60
Fig. 62-5
6
7
8
2
4
9
10
11
12
13
Fig. 63-1
2

出 土 遺 物 (1)



出 土 遺 物 (2)